The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	随想 : 海
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1974, 7, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＊随想＊ 海

財団法人 大阪防疫協会
理事長 辻野直三郎

ふるさとを眺めて加太は
　風浪（しけ）にけり

この駄句は数年前用務で紀州加太に行き閑を見て釣を楽しまんとしたが、あいにくの風浪で中止のやむなきに至った当時の句であるが思い出にのこるものがある。

さて、ふるさとの思い出、少年時代の津田浜海岸は夏は焼きつくような砂浜が続き、遠くには亀之瀬燈台が、行きこう汽船や漁船の守りとして、煌々（こうこう）たる燭光を放っている。夏の日ざかりなどには悪童どもが腕自慢をほこって数海里先きのこの亀之瀬燈台まで遠泳などを試みたものであるが、余程の者でないかぎり大抵は途中から引き返えしたものである。中には勇敢な悪童が燈台までたどりつく者があるが時には漁船で迎えに行くという「おまけ」までつくこともあった。

穏かな春から初秋にかけては「地引網」がおろされる。一番手二番手三番手というように次から次に地引網がおろされ、砂浜から荒縄引きの「ロクロ」が二手に分れてスピードを合せて引きよせ、更に荒縄網に変り、次々に網目は少さくなり、このあたりから比較的大きな魚鱗が活潑に飛び交ふ姿となり「海の男達」に「それ来たやれ引け」とまるで叱咤（しった）の大声となる。この時分から熟練のおのこ達は首筋まで海中に没しながら網の外に逃れんとする魚群を手際（てぎわ）よく袋網に追込むさまは、雄大壮厳と称すべきか、圧巻そのものである。ここに大勢は決す。

「ロクロ」引きより袋網まで三時間前後でその日の漁獲高はついに決定する。少年の臨時のタイマーの報酬は、漁獲高にもよるが着用の帽子に一杯小魚を入れてもらって、手には「こち」か太刀魚一尾位もらって、いきようようと帰宅した思い出は今もなお脳裡によみがえる。

そのように蛋白源を村民たちに供給してくれた「海の幸」は今は望むべくもない。美しかった遠浅の海浜も、今は跡かたもない。もちろん海水浴場として盛んだった光景も、既に遠い昔？の物語りとなってしまった。三月の節句の時に楽しんだ蛤（はまぐり）拾いも出来ないし、颱風の翌日荒れくるった大浪に海底より根こそぎ掘上げられたバカ貝を「たも」ですくい上げる雄大な光景も、今は味わうすべもない。

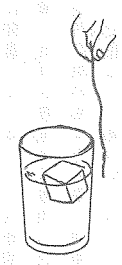
なぜかかる時代になったのであろうか？　砂浜の中に貯木場が造られた。浜の近くには供給公社の住宅が造られた。砂塵をまいて貨物自動車が行き交う。少年時代のあの美しかった白砂青松も今はその名ごりをとどめるのみ。亀之瀬燈台の遠泳も昔物りとなった。これで海国日本の少年は育つであろうか？　海があって海国日本魂は滅ぶ。何の故ぞ……高度成長の名において破壊された日本の姿の現在を憂うものは私一人ではあるまいと。

（妄言多謝）

大阪湾の小型底びき漁業
（大阪府水産試験場提供）

マジック・クイズ

コップの中に四角い氷が一つ浮いている。氷に手を触れることなく、一本の糸でこの氷をコップから取り出すにはどうしたらよろしいか。



（クイズの雑学博士より）
＜喜多＞